



ぽれぽれレター

第29号
2016.05.20

医療コラム 緩和ケアってなんだろう



緩和ケア科
後明郁男 医師

緩和医療学は、がんや難治性神経筋疾患あるいは後天性免疫不全症候群（エイズ）の進行期・終末期のように、現時点では治療法（キュア）の効果が期待できない、しかも身体的心理的な苦悩がとても深刻である患者さんの苦痛症状の緩和を目的として、近年（欧米では1960年代から、わが国では1980年代から）発達してきた臨床医学の一分野です。

学問としては「緩和医療学」、その臨床実践を「緩和医療」あるいは「緩和ケア」といいます。

治療が期待できなくなったがん患者さんが医療・福祉・保健の連携の輪から落ちこぼれてしまった反省にたって、これら連携の再構築を重要な課題としており、**また、臨床疫学的な検討に耐えうる（つまりエビデンスのある）治療方針の開発と実践を目指しており、旧来の経験的な対症療法とは明瞭に一線を画します。**

緩和医療学が対象とする疾患群は、がん以外にも、難治性神経筋疾患や後天性免疫不全症候群もきわめて重要ですが、有病率が「がん」が人口10万人あたり3000人以上であるのに対し、他の2疾患群はそれぞれ数名ないし数十名程度であり、一般病院の臨床現場で接する機会ががんが圧倒的に多いので、必然的にがんの症状緩和がもっとも重要な課題となっています。なお、がんの緩和ケアは、他の2疾患群の症状緩和にも大きなヒントを与えています。

進行がん・終末期がんの症状というと、「がんの激痛」をすぐに連想すると思いますが、痛み以外にも、さまざまな心身の苦痛・苦悩が噴き出すので、臨床現場で痛みだけが問題になるわけではありません。しかし、（仮にもしきちんとした鎮痛治療がなされない場合）苦痛の激しさと発症頻度の高さ（がん終末期では、**60%の患者に痛みが感じられ、その3分の1は耐え難い激痛といわれています**）からみて、痛みが最も重要な症状であることは間違いありません。



かつて難攻不落を思われたがんの激痛は、近年の基礎疼痛学の発展と臨床経験の蓄積によって、今や、きちんと診断してきちんと治療すればその8-9割で、本人が納得出来る程度の鎮痛が（数日以内で）得られるようになりました。**痛みこそがさまざまな症状のなかで最も対処しやすい症状になったという事実はもっと知られて良いことと思います。**

がんは数の上ではごくありふれた成人病（生活習慣病）になりました。男性の2人に1人、女性の2.5人に1人は、人生のどこかで、それが治療するがんか、死に至るがんかは別として、がんという病に遭遇します。今はそのような時代です。

理念
「人よりそう ひらかれた病院」
病院基本方針
※安心・安全ながん医療を提供します
※医療提携を進め、地域医療に貢献します
※豊かな人間性を持った医療人の育成に努めます

診療案内
内科 外科 脳神経外科
整形外科 耳鼻咽喉科
婦人科 泌尿器科 放射線科
消化器科 緩和ケア科
乳腺外科 腫瘍外科 腫瘍内科

【診療受付時間】
午前8:30～正午

【診療時間】
平日 午前9:00～午後5:00
土曜 午前9:00～正午

【外来の休診日】
日曜・祝日・年末年始

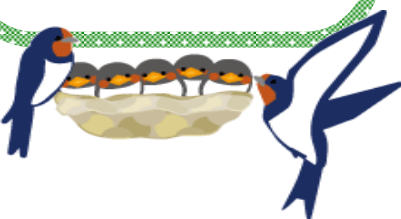
【お見舞い時間】
正午～午後8:00



院内の あんなところ、こんなところ



2階病棟には2階なのに中庭があります。中庭の上は吹き抜けになっており、病棟各階から見る事が出来ます。季節毎にお花を植えたり、イルミネーションを飾ったりしています。



強調したいことは、従来もっとも恐れられてきた、そして今も多くの人びとが恐れているがんの痛みは、その多くが日常生活の継続に支障がない程度まで大幅な緩和が可能になったということです。これに従って、緩和医療学・緩和ケアの研究の焦点は、痛み中心であったこれまでの状況から、呼吸困難感、身の置き所のないだるさ、栄養障害（がん悪液質）、食欲低下、精神症状（不安・焦燥感、不眠、抑うつ悲嘆状態、せん妄など）の緩和に幅を広げています。



緩和ケアは、「患者さんとその家族」、「主治医」、「緩和ケアチーム」の3者が連携したとき、最も実効性を発揮しやすい状況になります。

当院の「緩和ケアチーム」は、緩和ケアの経験を有する、医師、薬剤師、看護師、社会福祉分野の専門家（医療ソーシャルワーカー）、臨床心理士、理学療法士、栄養士のゆるやかな連合組織で、各病棟で週に1回程度の回診を行っています。

新入職員紹介

2016年4月、15名の新入職員（医師3名・薬剤師2名・看護師8名・臨床検査技師1名・診療放射線技師1名）が加わりました。新メンバーを加えると、4月1日時点で医師15名、看護師125名、薬剤師9名、診療放射線技師14名、臨床検査技師4名、理学療法士4名・言語聴覚士1名、作業療法士1名、臨床工学技師1名、臨床心理士1名、管理栄養師3名、看護助手22名、クラーク11名、SE1名、診療情報管理士2名、医事課8名、総務5名、地域医療連携3名、秘書1名、保育士6名、保育助手2名 総勢239名となります。その他、外来診療については約30名の非常勤の先生方にご協力を頂いています。



新入職の皆さんと一緒に写っている方々は、下段左から東村看護部長・中村病院長・林院長補佐・香嶋事務長と上段右から2番目、上森薬剤部長です。

2007年8月にスタートした当院も、今年の8月には10年目を迎えることとなります。民間病院としては西日本で初のがん専門病院を目指してまいりましたが、徐々にその目的に見合った機能と環境が整いつつあります。また10年の歳月と共に彩都の街も大きくその姿を変えました。緑と花があふれる彩都の良さを残しつつ街にはマンションやお店が増えはじめ、往来する人々の数もぐっと増えてきました。

この彩都の街の発展と共に、彩都友誼会病院も発展を継続し、少しでもがんに苦しむ人達を救える病院となるように職員一丸となって頑張っ進んでいきます。

編集後記：葉桜の季節になり、過ごしやすくなりました。九州では4月14日に発生した熊本地震で現在も多くの方々が避難生活を続けておられます。一刻も早い復興を願ってやみません（岩切）

発行者：中村仁信（病院長） 〒567-0085 茨木市彩都あさぎ7丁目2番18号
編集長：福西康修（放射） TEL072(641)6898 Fax072(641)6097
編集委員：村井祐子（医師）岩切昭夫（看護）常島啓司（情報）林綾子（看護）
志田原直子（医事課）春名雅裕（リハビリ）松尾真奈美（放射）



<http://www.saito-yukokai-hp.jp/index.htm>

「ほれほれ」はホームページからダウンロードできます！

このニュースレターご希望の方は総合受付・地下受付にお越し下さい